

2017/08/20

## 「弱さとは何？」

人は不安を感じる「心」、人と比較して劣っている「体」、そうした自分の姿に「弱さ」を感じる。具体的に言うなら、困難に立ち向かうことのできない自分、すぐにあきらめてしまう自分、誘惑に負けてしまう自分、そういう「心の状態」に対して「弱さ」を感じる。病気を覚えやすい体、機能が劣っている体、見た目が劣った体、能力の劣った体、そういう「体の状態」に対して「弱さ」を感じる。そして、人は「弱さ」を恥ずかしいと思い、それを隠そうとする。

そこで、どうして人にはそのような「弱さ」があるのか、そもそも「弱さ」の意味は何なのか、そうした人の「弱さ」を考えてみたい。では、人の「弱さ」を知るために、人の造りはどうなっているのか、そこから見えてみることにしよう。

### ● 人の造り

聖書は、人の造りを次のように教えている。

「大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」（ローマ 12:5）

「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」（I コリント 12:27）

「私たちはキリストのからだの部分だからです。」（エペソ 5:30）

「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。」（コロサイ 3:15）

どの御言葉も、人は神と一つとなるように、神と一体性を持つように造られたことを教えている。その神は「三位一体の神」であり、神にも一体性がある。「わたしと父とは一つです」（ヨハネ 10:30）。つまり、神が一つであるように、人も神と一つとなるよう造られた。「わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです」（ヨハネ 17:22）。さらに言うと、神は人がご自分と一つとなれるよう、何と、ご自分の「いのち」で人の「いのち」となる「魂」を造られた。

「神である【主】は土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」(創世記 2:7)

「いのちの息」の「いのち」と訳されたヘブライ語は「ハイイーム」[חַיִּים]で、「複数形」の単語になっていて、ここでは三位一体の神の「いのち」を表している。次に、「息」と訳されたヘブライ語は「ネシャーマー」[נְשָׁמָה]で、「魂」という意味がある。この御言葉は、神は人の「魂」を神の「いのち」で造られたことを教えている。ゆえに、人は神と一つとなって生きられる。いや、神との一体性の中でしか生きられない造りになっている。

このように、人は神の部分として造られた。神抜きでは存在できないように、神との一体性の中で生きるように造られた。「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです」(使徒 17:28)。このことから、何が人の「弱さ」なのかが見えてくる。

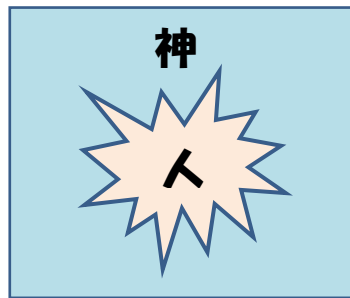
#### ● 人の「弱さ」

人は神の部分であり、単独では生きられない。となれば、人にとっての「死」は、神との結びつきを失うことを意味する。イエスも、神との結びつきを失った者に対し、「死人が神の子の声を聞く時が来ます」(ヨハネ 5:25)と言ひ、神の声を聞き神との結びつきを取り戻すなら、「聞く者は生きるのです」(ヨハネ 5:25)と言われた。また、人が生きるには神との結びつきが不可欠なので、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」(マタイ 4:4)とも言われた。このことから、何が人の「弱さ」なのかが見えてくる。それは、神なしでは生きられないという性質にほかならない。

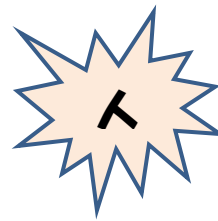
しかし、神なしでは生きられないという性質は人の「弱さ」であっても、そのおかげで「魂」は神を慕い求めることができる。「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます」(詩篇 42:1)。この「弱さ」のおかげで、人は神に生かされる「恵み」を知ることができ、神の「恵み」も人の中に働くことができる。したがって、人の「弱さ」は「宝」である。パウロはそのことを神から教えられたので、次のように証した。

「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」(II コリント 12:9)

こうした神と人との関係を何かに譬えるなら、神はパズルの板であり、人はそこに寸分違わず収まる「パズルのワンピース」ということになる。そうであるから、人(ワンピース)は神というパズルの板に収まっているときは神と一心同体となって「強い姿」となるが、神というパズルの板から外れてしまうと、生きることのできない無力な「弱い姿」になってしまう。神と人とは、まさしくそういう関係であることを聖書は教えている。



【強い姿】



【弱い姿】

このように、人には神なしでは生きられないという「弱さ」があるおかげで、神と一つとなって生きられる。パウロはその恵みを知り、「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」（ガラテヤ 2:20）と証した。人が持つ「弱さ」は、まことに「宝」である。

さて、この「弱さ」は、人が神というパズルから外れることなくしては現れない。人は神と一つとなっているときは神によって強くされているので、神との結びつきを失わない限り自分の「弱さ」を知りようがない。しかし、ここに事件が起きた。全ての人が神との結びつきを失うという、とんでもない事件が起きてしまった。それはアダムの時代に起き、それにより、人は神なしでは生きられないという自らの「弱さ」と対面することになった。では、その事件を見てみよう。

- アダムの時代に起きた事件

アダムは神の部分として造られた。「私たちはキリストのからだの部分だからです」（エペソ 5:30）。神が一つであるように、アダムも神と一つとなって生きるように造られた。「わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです」（ヨハネ 17:22）。だから、アダムは神と「一つ思い」を共有して生きていた。そのアダムからエバは造られたので、エバも神と「一つ思い」を共有して生きていた。

ところが、そこに悪魔が登場する。悪魔は蛇を使ってエバを欺き、「神と異なる思い」を信じ込ませた。それにより、食べてはいけない物を食べさせた。「しかし、蛇が悪巧みによってエバを欺いたように」（Ⅱコリント 11:3）。アダムもエバにつられて「神と異なる思い」を信じ、同様に食べてはいけない物を食べてしまった。二人は罪を犯したのである。「神と異なる思い」を信じたことが、まさに罪となった。

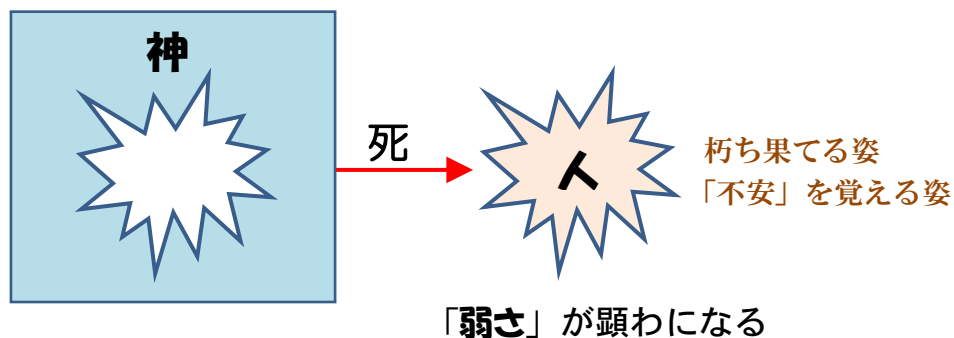
当然、「神と異なる思い」を信じるといふ罪を犯せば、神と「一つ思い」を共有する関係は立ち行かなくなり、神との結びつきを失ってしまう。実際、そうってしまった。この事件を「死」といい、その「死」が全ての人に及んだのである。「このようなわけで、一人の人によっ

て罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです」(ローマ5:12 新共同訳)。こうして人はみな、神との結びつきを持たない状態で生まれてくることになった。そうすると、人はどうなるだろう。

人は神なしでは生きられないという「弱さ」を所持していたために、当然のことながら神との結びつきを失う「死」が入り込めば生きられなくなる。具体的に言うと、人の「魂」は神との交わりができなくなるので「不安」を覚えるようになる。その「不安」が、困難に対する恐怖を覚えさせる。人が覚えるあらゆる心の「弱さ」はこうして始まった。

それだけではない。人の「体」は生きられなくなり、本来持っていた永遠に生きるための能力は失われてしまう。そうなれば、病気をしたり、体の不自由を覚えたりしながら「肉体の死」を待つしかない。人が覚えるあらゆる体の「弱さ」はこうして始まり、最後は土に帰る姿となった。だから神は、「死」が入り込んだアダムに対し、「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る」(創世記3:19)と言われた。

このように、神との一体性の中で暮らしていたときは知る由もなかった自分の「弱さ」を、アダムの時代に起きた「死」という事件を境に人は知るようになった。神なしでは生きられないという人の「弱さ」が、具体的な姿となって現れたのである。人は神のパズルの板の「ワンピース」であったのに、「ワンピース」だけとなった自分と対面することになってしまった。それは「不安」に怯える姿であり、朽ち果てる姿であった。私たちは今日、この姿を自分の「弱さ」として認識する。



さて、そうすると疑問が湧いてくる。本来人の「弱さ」は、神と一緒に生きていくために必要な「宝」であり、誇りであった。しかし、私たちは具現化された「弱さ」を誇りではなく「恥」とし、何かで隠そうとしてしまう。これは一体どうしたことなのか。そうした疑問が湧いてくる。その疑問を解くために、アダムの時代に起きた事件の続きを見てみよう。

### ● 「弱さ」に対する反発

アダムとエバは、悪魔の仕業で「神と異なる思い」を信じてしまった。そのことで神との結びつきを失った。これを境に、神との結びつきがない自分たちの姿を知ることになった。それは、朽ちる体となった姿であり、「不安」に怯える姿であった。彼らは、まさに裸となった自分を初めて知ったのである。それを知った瞬間、言いようもない「恐れ」に襲われ、その姿をとっさに何かで隠そうとした。その様子を、聖書は次のように綴っている。

「このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。」(創世記 3:7)

人が知った裸の自分こそ、神なしでは生きられないという「弱さ」が具現化した姿であった。それは、神と人とを結びつける「宝」を意味する姿であるにもかかわらず、人は初めて知る自分の姿を恥ずかしいと思い、それを覆い隠そうとしたのである。まさしく、今日の私たちと全く同じ反応を示した。ここにこそ、「弱さ」を「恥」とし、様々なもので隠そうとする生き方の起源がある。人のこの反応は、次の理由からであった。

人の「魂」は神の「いのち」で造られていた。そのため、「魂」は何ものにも制約されない「無制約」の神を知っている。そこに属する「無制約」の自分を知っている。そうした事情から、生きられないという制約を受けるようになった自分の姿に対し、それは本来の姿ではないと拒否してしまう。制約に対し、すなわち「弱さ」に対し猛烈に反発する。それが「弱さ」を「恥」とし、様々な「鎧」で隠そうとする行動となった。「鎧」を身にまとうことで「弱さ」を拒否し、制約の少ない「特別な自分」を目指すようになった。

こうした反発は、絶えず自分の思いの中で繰り返されている。例えば、いくら生きられなくなるといふ制約を受けても、永遠に生きられる自分を人は自由に想像する。いくら神が見えないという制約を受け「不安」を覚えるようになっても、何ものをも恐れなくて勇敢に戦う自分を自由に思い描く。それだけではない。宇宙を独り占めにする自分も、過去や未来を自由に行き来できる自分も思い描き、何ものにも制約されない自分を思いの中で絶えず主張する。そうやって、制約を受けた姿に反発し、自分の「弱さ」を実際に拒否する。

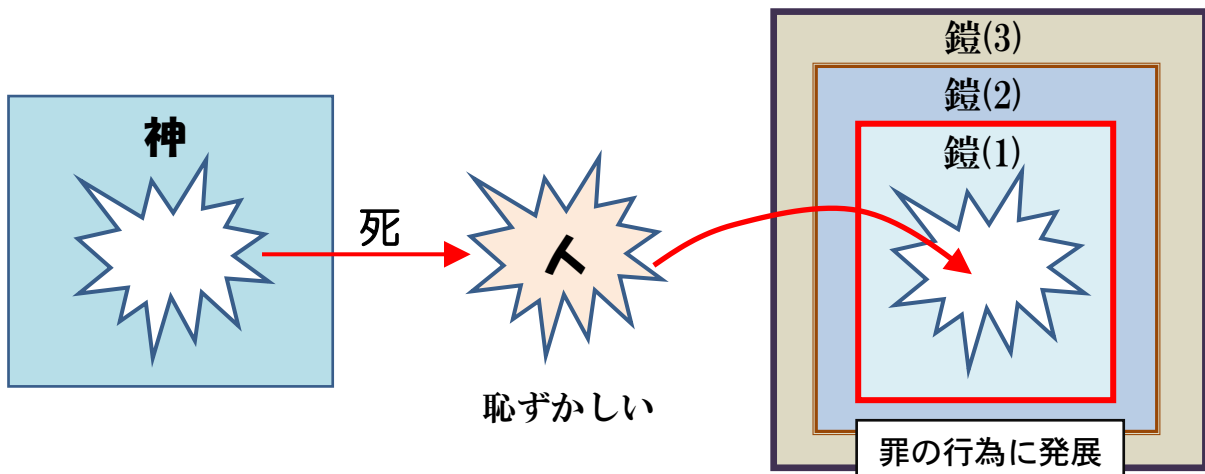
このように、人の「魂」は神に属し、神と共に「無制約」の中で自由に生きる自分を知っているために、制約を受けた自分の姿に反発する。この反発は、まさしく神との結びつきを失う「死」によって生じた。「死」は神から人を引き離しただけではなく反発も引き起こさせ、「弱さ」の意味を変えさせてしまったのである。「弱さ」は神のパズルに寸分違わず収まる「宝」であるにもかかわらず、それを「恥」と思わせてしまった。このことがその後、人に悲劇をもたらすことになる。それはこうであった。

● もたらされた悲劇

「死」の圧倒的な力によって、人は具現化された自分の「弱さ」に反発を覚えさせられ、「弱さ」を恥と思うようになった。そこで、人は「弱さ」を隠そうと必死になった。少しでも人から良く思われる「鎧」を手に入れ、その下に「弱さ」を隠そうとした。具体的には、人から称賛される「容貌」や「肩書き」、人が「わーすごい」と言ってくれる「富」や「知識」、人の関心を惹ける「行い」や「能力」、そうしたものを「弱さ」を隠す「鎧」とした。

ところが、少しでも人から良く思われる「鎧」を手にするには競争に勝つ必要があった。競争に勝ち、周りの「鎧」よりも勝っている必要があった。そのため、人は互いの「鎧」を比べるようになり、怒りや嫉妬を覚えるようになった。この怒りや嫉妬が、様々な罪の行為へと人を誘導した。

それだけではない。人は「弱さ」を拒否したために、それを見ないようにと「快樂」もむさぼった。「快樂」という「鎧」で自分の「弱さ」を見ないようにした。こうして人は、罪の行為へと走った。すなわち、人は様々な「鎧」で「弱さ」を隠そうとしたことで、罪を犯すようになったのである。そのことが人を苦しめた。まさしく「弱さ」に対する誤った対応が、人に罪を犯させるという甚大な悲劇をもたらした。



このように、人の中に神との結びつきを失う「死」が入り込み、神なしでは生きられないという「弱さ」が具現化したものの、人はそれを「恥ずかしい」と思われたことで悲劇が起きた。本来であれば、具現化した「弱さ」は神なしでは生きられないことを示した印であり、神と人とを結びつける「宝」であるにもかかわらず、人はその意味を、悪魔の仕業による「死」の圧倒的な力の下で勘違いさせられてしまった。そのことで、人は罪を犯すようになった。

まさに「死」の圧倒的な力が、人の中に「罪」を生ませた。「死のとげは罪であり」(I コリント 15:56)。これが、もたらされた悲劇である。

無論、神は人の悲劇を放置されない。だから神は、こうした悪魔の仕業を打ちこわすために来られた。「神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです」(I ヨハネ 3:8)。

- 「勘違い」を是正する

神との結びつきを失う「死」が入り込んだことで、神なしでは生きられないという人の「弱さ」は表舞台に立った。それは精神的な制約であり、体の制約であった。人はそれを直ぐさま自分の「弱さ」として認識するも、「死」の圧倒的な力の下では、単に自分の劣った姿という認識になり、「恥」と思うようになった。そこから発展し、劣っている姿を罪に対する神の罰だと思ふようになった。しかし、人が認識した「弱さ」こそ、神と人とを結びつける「接着剤」であり、人が誇れる唯一の「宝」であった。

そこでキリストは、ご自分も人と同じ「弱さ」(制約)を持つ「イエス」として来られた。「彼は、自分自身も弱さを身にまとっているので」(へブル 5:2)。それにより、「弱さ」に対する勘違いを是正しようとされた。手始めにイエスは、「弱さ」を恥と思わせ、「鎧」で覆い隠させようとする悪魔の試みに会われた。だがイエスは、「鎧」には手を出されなかった。そのことで、「弱さ」と「罪」とは別であることを教えられた。

「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんが、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」(へブル 4:15)

それからイエスは、人々の「弱さ」に対する勘違いを、その都度是正していかれた。例えば、あるとき弟子たちが目の見えない「体」を持つ者を見たとき、その者の「弱さ」(制約)を神からの罰だと思ってしまった時があった。それで彼らは、イエスに次のような質問をした。

「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」(ヨハネ 9:2)

これに対し、イエスはこう答えられた。

「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。」(ヨハネ 9:3)

イエスはここで、体の「弱さ」は、「神のわざがこの人に現れるため」のものであり、神の恵みを受け取るための「宝」であると、弟子たちに教えたのである。イエスはそう教えることで「弱さ」に対する勘違いを是正し、「弱さ」を本来の正しい位置に戻そうとされた。

また、あるときイエスは、弟子たちにご自分の祈る姿も見せられた。それは、神なしでは生きられないご自分の「弱さ」を全く隠さず、「弱さ」を前面に出された姿であった。

「イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。」（ルカ 22:44）

イエスはここで、「弱さ」を立派な「鎧」で隠そうとしていた弟子たちに対し、「弱さ」は神のもとに持っていくことを教えられた。「弱さ」は神と寸分違わず一つとなれる恵みであるからこそ、神に対して切に祈れることを教えられた。それにより、弟子たちの「弱さ」を本来の正しい位置に戻させようとした。

こうして、イエスは「弱さ」に対する勘違いを是正していかれた。その最後の仕上げが、「弱さ」の揺るぎない象徴となる「肉体の死」を、自らが十字架で背負うことであった。イエスは「弱さ」の象徴を背負い、十字架で死なれたのである。そして三日後に、神の力によってよみがえられた。自らが人の持つ最大の「弱さ」を背負い、そのことゆえに神と一つとされ生きるようになれることを証しされたのであった。

「確かに、弱さのゆえに十字架につけられましたが、神の力のゆえに生きておられます。」（Ⅱコリント 13:4）

このように、人は「弱さ」を勘違いさせられていたので、キリストはその勘違いを是正するために自らも「弱さ」を持って来られ、「弱さ」があるからこそ神と結びつくことができることを十字架で示された。「弱さ」にこそ、人の救いがあることを示された。この御業により、人が覚える「弱さ」は、神と人とを結びつける「宝」であることを人は知ったのである。

#### ● 「弱さ」は「宝」

キリストは、人が覚える「弱さ」の意味を教えてくださいました。それは「宝」であると。しかし、未だに多くの人が「弱さ」を「宝」だとは知らない。制約を受けた姿の意味を知らない。知らないから、制約を受けた姿を恥とする。恥とするから、自分より多くの制約に苦しんでいる人たちを「障害者」と呼び、制約の少ない自分を「健常者」と呼んで、安心しようとする。それは実に残念なことである。



確かに人が覚える様々な制約は、生きる上で様々な「障害」となる。しかし、それはこの世界での話であり、人と神との関係に於いていうなら、そうした制約は何の「障害」にもならない。むしろ、それがあのおかげで人は神と一つになれる。ゆえに、神の目から見ると「障害者」など一人も存在しないのである。

そもそも私たちは、誰もが「肉体の死」に至るという比類なき制約（弱さ）を持っており、それは全てのもを無にしてしまう。人が比べる「うわべ」の違い、能力の違い、機能の違い、そうした体の違いをも全て呑み込んでしまう。人は互いを比べ、「障害者」、「健常者」という区別をするが、人の持つ比類なき制約（弱さ）は、そうした区別を空しいものにしてしまうのである。そういう意味では、誰もが等しい。誰もが、神の助けなくしては生きられない「弱さ」を持つ者で間違いない。だから、そうした自分の「弱さ」を知る心の貧しき者は幸いとなる。その人たちには神の恵みが豊かに働くからだ。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」（マタイ 5:3）

これに付け加えるなら、どんなに制約を受けた弱い「体」であろうとも、どんなに「不安」を覚える弱い「心」であろうとも、そこには、神の「いのち」で造られた「魂」がある。その「魂」は、そうした「うわべ」に関係なく、みな等しい。というのも、人は神との結びつきを失ったことで「体」は有限性を帯び、「魂」は神と「疎外」された関係になったというだけで、「魂」自体がどうにかなったわけではないからだ。誰の「魂」であっても神の「いのち」がそこにあり、その「魂」はみな等しく、素晴らしい姿をしている。すなわち、人はみな、「うわべ」に関係なく同じ価値を有しているということだ。ゆえにイエスは、次のように言われた。

「うわべによって人をさばかないで、正しいさばきをしなさい。」（ヨハネ 7:24）

これは何を意味するかというと、この世界で「障害者」と呼ばれている人たちであっても、見た目の制約がどんな人であっても、「うわべ」に全く関係なく、誰であれ救われるチャンスがあるということだ。なぜなら、神は人の「魂」に呼びかけ、「魂」を救われるからだ。誰の「魂」であっても神の呼びかけを聞くことができ、その呼びかけに応じるなら救われる。救われたなら、終わりの日に「無制約の体」（御霊のからだ）に着替えさせられ、よみがえる。こうして、人は寸分変わらず神のパズルの板に収まり、誰もが神と同じ姿になる。

「わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。」（Ⅱコリント 3:18）

このように、人の覚える「弱さ」は恥などではない。それは、神なしでは生きられないことを示す証しであり、その「弱さ」の下には神の「いのち」で造られた素晴らしい「魂」がある。

だからこそ、人の覚える「弱さ」は「宝」なのである。具現化された「弱さ」は、まさしく「魂」が神との一体性の中で生きるために必要な姿であり、その姿ゆえに人は神を必要とすることができ、神の恵みの中で生きられる。したがって、私たちは自分の弱き姿を尊び、むしろ大いに喜んで「弱さ」を誇るべきである。

「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」(Ⅱコリント 12:9)

「弱さ」を誇りに思えるようになれば、「弱さ」は正しい位置に戻り、その人に起きてきた悲劇も終わりを迎える。そのことをキリストは知るからこそ、自らも「弱さ」を持って来られ、その姿を恥とはされなかった。それどころか、「弱さ」の象徴となる「肉体の死」を以て十字架で死なれ、神の力によって生きられた。「弱さ」は誇りであることを、自らが証しされた。

私たちは「弱さ」を持つ弱き者であって、イエスがされたように自分の「弱さ」を恥とすることなく誇りに思えるようになるなら、その「弱さ」ゆえに神の力で生かされ、本当の意味でキリストとともに生きる者となれる。

「確かに、弱さのゆえに十字架につけられましたが、神の力のゆえに生きておられます。私たちもキリストにあって弱い者ですが、あなたがたに対する神の力のゆえに、キリストとともに生きているのです。」(Ⅱコリント 13:4)